
変わりなき世界の中で

サイレン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

変わりなき世界の中で

【Zコード】

Z2018Z

【作者名】

サイレン

【あらすじ】

小さな頃俺は真っ暗の世界にいた、何もかもがわからず、生きていくことすら億劫な人生だったが、そんな真っ暗の世界の中で一人の女の子に救われた。

毎週日曜日更新予定

プロローグ

俺の幼い頃の世界は真っ暗だった。

暗い暗い押し入れの中では何一つ見えず、何一つ聞こえず、毎日のよつに暴力を振るわれ、時々親の気紛れで食べ物やちよつとした物を貰う、そんな与えられた物だけの世界だったが、物を貰えるということに喜びを覚えた。

父と母は仲が悪かった、いや昔は良かつたらしいのだが、俺が産まれてから何年かしてから子疲れしてしまった父は仕事をクビになり毎日、毎日酒やギャンブルに身を染めていた。

母はそんな父を見てわけのわからないことを叫び出したりしておかしくなつたらしい。

俺は物心着いた時から俺は押し入れの中に閉じ込められていて、出ることを許されなかつた、そして毎晩、毎晩狂つてしまつた母に殴られる、俺が泣こうが逃げようとしたのがお構い無く殴り続ける『どうしてアンタなんて産まれて来たのー?』 そう呪うように叫びながら…。

暴力は父も振るつてきた、しかし母とは幾つも違うところがある、それはあの呪いの言葉を言わない事や、暴力が終わつて酔いが醒めた後に必ず謝つてきたことだ。

『ごめんよ、俺が、俺がもつと強い心を持つてしつかりしていればと父は涙を流しながら俺を抱き締めるが、母の暴力にはまるつきり見て見ぬふりをする。

俺はそんな日々を五歳になるまで過ごし続けていた
人生の転機となつたのは忘れもしないあの例年より暑い夏のある日だつた。

その日は偶々、母の妹が小さな女の子を連れて遊びに来ていた。

俺は誰かが来た時は押し入れで声を出す処か、音が出る行為を禁じられていたから、押し入れから聞き耳をたてて母や叔母がどんなこ

とを話しているかを聞く。

俺の両親以外は俺が押し入れに閉じ込められて虐待されていると言う事実を知らなかつた。

母は他人が家に来るとやけに落ち着き、いつものように狂つたような呪詛を言つたりせずに平常心を保つてゐる。

そんなときだつた

叔母が連れてきた女の子はいきなり俺が入つてゐる押し入れを開けた。

俺は聞き耳をたてる為に襖に張り付くよつとしていたのでいきなり襖が開いたと同時に開けた彼女の直ぐ横に倒れ込んだ。

『きやあああー』それと同時に叔母の叫び声と母の叫び声が響き渡る。

叔母は俺が今父と遊んでもらつてゐるから居ないと聞いていたのにいきなり俺が出てきた事に驚き、母は今まで隠してきたことの発覚に恐怖し驚いた。

母はその後呆然として叔母が救急車と警察を呼んで連行される時に『私は悪くない、悪いのはあの子よ、そうよあの子が死ねば良いんだつた』ぶつぶつ呟きながら俺の目の前から消えていった。

その数時間後に首を吊つて自殺をした父が見つかり、その報告を受けた母はパトカーから飛び出し反対車線から来た車に轢かれて死んだらしい。

俺はたつた1日で両親を無くしてしまつた。

一方俺は栄養失調で倒れて病院に運ばれた。

医師や叔母が言つにはとても安心しきつた顔でこのまま眼を覚まさないと思つ程に寝ていたらしい。

その日から俺の日常が変わつた、眼を覚ましてからまず見たのは、美味しそうな料理だつた、見たことも聞いたこともない食べ物が俺

を取り囲んでいた。

そして何より世界全体が明るかつた。

数ヶ月して元気になつた俺は退院を許された、しかし俺が帰る場所は無く、事件の時側に居てくれた叔母が俺を引き取つてくれた。初めの方は誰一人信じられず、押し入れの中でうずくまつていた、そんな俺を変えてくれたのが俺を押し入れから見つけてくれた女の子だつた。

彼女の名前は柴川彩さいかわあや、彼女は俺より一つ下なのに幼稚園が終わると毎日、毎日心配して押し入れまで来てくれた。

『ねえ、君の名前を教えてよ、それから一緒に遊ぼうよきっと楽しいよ?』

あまりにもしつこく押し入れを開けて問い合わせてくるから、俺は前から気になつていてことを聞いてみた。

『どうして僕が押し入れの中に居るつて分かったの?』

と聞いたら簡単そうに笑顔で答えた。

『当たり前だよ、だって君の助けてつて聞こえたんだもん』

俺は今まで自分の生き方を不自由とは思つたが、辛いと思つたことは無かつた筈だ、それなのに彼女は俺からのSOS信号を受け取つたと言つ。

俺はその時理解した、俺は本当に苦しかつた事を苦しいと言わなかつたから知らず知らずの内に知らない誰かにSOSを出していたの

かもしないと。

俺はその時彼女に賭けてみたいと思った、自分の何かを認めてくれ
そうだからだ。

だから俺は信じてみた、神なんていない、誰もが敵だと思っていた
のに。

『僕は、あいはら ゆうすけ相原祐介』

その時彼女は本当に嬉しそうに笑顔で俺に『よろしくね』、そう言
つてくれた

その日から徐々に周囲の人とコミュニケーションを取るようになっ
た。

もし、あの日、あの時彼女が俺に気づかずいたら今の世界はあり
得なかつたのだろう、闇の中から俺を引きずり出してくれた彼女に
今でも感謝している。

そして俺も彼女を守り、彼女のよう人に助けられるようになりた
い、そう願っている。

第一話（前書き）

ひとまず一話だけ投稿します。

それは突然の出来事だつた。

その日の授業もほとんど終わってこの一時間が終われば家や寮に帰れる、誰もがそう思つている矢先の出来事だった。

俺といつは中学の時からの腐れ縁といつやつで、いつも馬鹿をやつてる相手だった。

担任の明智総子が即座に怒声を浴びせると同時に手に持つていたチヨークを投げつけた

いつもながら見事な技だと感心していたのもつかの間で、首もとに光に当たつて反射するナイフの様な物を向けられていた。

ପାତ୍ରାବଳୀ

（この学校でこんなことをする人は数人ぐらいだが、その中でもナイフを使うのはあの人だけだ！）

座っていた椅子を即座に蹴り、そのナイフの様な物を向けた張本人に直撃を狙い、距離をとる。

.....」

襲撃者は何一つ語りはず、ナイフを一閃させるだけで椅子を吹き飛ばした。

クラス内からは彼女の登場に口笛を吹き、歓喜を上げていた。

（お前らは一体どっちの味方だ、少しほはクラスメイトを助けようとはないのか！？）

そつは思つたが、無駄だと割りきりしつかりと襲撃者を見据える。

「……」

予想は出来ていたが、いざ対面すると恐怖が湧いてくる、何せ相手は隣のクラスの2年4組『佐上遊』（さがみゆう）、名前とは裏腹にふざけた事が大つ嫌いで風紀委員に勤めている校内では『沈黙の暗殺者』（サイレントアサシン）と呼ばれるほどの手練れなのだ。入学当初から彼女の勘違いで襲われ、あの殺傷能力ないが、触れば痺れるナイフ『クロジア』を一度回避した後二度目の一振りで痺れさせられたのをよく覚えている、その時から俺は多少は出来る危険人物として目を付けられていたので、俺が馬鹿をやる度に自然と俺の前に立ち塞がる事が多くなった。

見た目こそは小柄で黒のボニー・テールで可愛らしいのだが、校内の風紀を乱そうとした者には容赦がなく、『クロジア』を使い、相手に姿を見られる前に接近し、クロジアの力で痺れさせて事件を解決する、沈黙の暗殺者の由来もここから来ている。

因みに俺と今までの戦績は22戦17勝5敗となっている、そんな俺だが実力は低く雑魚敵もいいところ、簡単に説明すればマオに出てくるノコノコと同じぐらいの非力さだ、では何故俺がこんなにも勝ち越しているかと言つとちゃんとした理由があるが、今はとりあえず授業中+無罪なので説得してみる。

「ちよつと待つてくれ、俺は授業妨害なんてしてないぞ、大輔が勝手に叫び始めただけだ、なあ皆」

そう言つて皆を見渡してみるが、張本人の大輔はチョークによつて撃ち抜かれ、ご臨終、他の皆は我関せずと言わんばかりに黒板に書いてあることをノートに書き込んでいる。

「……」

（不味い、彼女から負のオーラが出ていい、これでは俺の命が！）

選択肢

1 逃げる

2 戦う

3 教師に助けを求める

まあ、選ぶとすれば無難な3と言いたいところだが、俺には分かる、明智先生は間違いなくキレてる、見ろあの手をブルブルと震わせチョークと言う名の弾丸をリロードしまくってるじゃないか、今にも発射しそう つ！？

「うおおおおつ！」

指から弾く様に発射されたチョークは佐上の頭を貫き、本日一人目の犠牲者となつた、一方俺はと言うと、発射される瞬間に転がりながら椅子まで直行して、席に戻して座つた。

「ふう、では授業に戻るぞ教科書のP15を竹下、お前が読め」

「うつす、えーと日本の経済は」

その後も授業は淡々と続いていた、俺の両サイドに額から煙を上げる一人を残したまま。

第一話（後書き）

続きは「日後ぐら」に投稿します。

第一話（前書き）

なんとか一日で書き終えました。

キーンゴーンカーンゴーン
授業終了の鐘が鳴ると同時に指導員の『藤岡堅地』（ふじおかけんじ）、が教室に来てチョークで撃ち抜かれた一人を掘んだ。

（おそらく指導室行きだらうなあ）

そんな風に思いながら見ていると目が会った。

「相原、お前もついでに指導してやろつかあ？」

筋肉ムキムキの身体で睨み付けながら問い合わせられたので命の危険が有りそうだし、何もしてないので丁重にお断りしておいた。

「ふん、まあいいか今はこの一人を指導するほうが先だからなー！」

ドスドスと足音を発てながら一人を引きづつて教室から出でていき、俺はこれから間違いなく一人に訪れるであろう悲劇に手を合わせて拝んでおいた。

「さてと、俺も家に帰るとするか

俺は高校に入学すると同時に柴川家を出でいき、現在は一人暮らしをしているが、先に言つておこう一人暮らしに憧れている者よ、全然自由では無いぞ、毎月光熱費や水道代やアパート代を払わなきやいけないし、飯の支度や洗濯等も自分でしなくちゃいけないんだ。しかし、俺には最高のお手伝いさんが居る！

「・・・べーん

おつ、近づいて来たぞ将来良い嫁に成る我が妹が。

「祐君」

トテトテと走りながらこちらに近づいてくるのは俺を救ってくれた人、歳は俺より一つ下なので一年生として今年の春に入学してきたばかりだ。

「良かつた、祐君まだ居てくれたんだ」

「まあ、」じつは今授業が終わつたところだからな、彩はびしきたんだ？ 今日は「道部の練習じやなかつたのか？」

俺が皆に心を開いてからは彩はすっかり俺に甘えたりするようになつた。

彩は俺と違つて早くも部活に入部したからそんなに暇な日はない筈なのだが。

「うん、」「道部の練習はあるけど、今日は私の家で家族揃つて懇親会があ つむぐう！？」

「わつ、馬鹿！」

俺は即座に彩の口を塞いで黙らせる。

懇親会をする理由は一つ、俺が柴川家から別居してこの高校付近のアパートに部屋を借りたからだ、その時叔父さんから出された条件の中に一週間に一度柴川家に家族全員で集まり、その間に何があつたかを報告する、それが幾つかある条件の一つだった。

俺は柴川家に引き取られはしたが、名前や名字を変えることはしなかつた、理由は単純下手に同情されたりその時の事を掘り返したりしてほしくないからだ、友達には単身赴任で両親だけ海外に行っている事にある。

幼い頃は親との縁が本当に切れてしまいそうちから変えたくなかつた、今はまだまだ多くの理由があるんだが、それは追々語つていきたいと思つ。

「うー！ むむー！？」

おつと、深く考え込んでいたようでの間にか彩は苦しそうにしていた。

俺は慌てて手を離して解放した、彩は解放されると同時に精一杯空氣を吸つて吐いてを繰り返していた。

「ふはっ、酷いよ祐君！」

「何を言つか、今のは変なことを言おうとするお前が悪い」

ふくつと頬を膨らませて、怒つていることをアピールするが、俺にはひまわりの種を口に入れているハムスターにしか見えそうに、近くに居る別クラスの奴がそれを見て俺には首を斬つて死ねと言つジェスチャーをして彩には天使を見るような目で見つめていた

（中々器用な奴だな）

そつ思つがとりあえず柴川家に向かうためその場から立ち去つたとき、廊下の曲がり角から何かが聞こえた、いや聞こえてしまつた。

「彩を苛める奴は誰だ——！」

廊下を全力疾走しながら角を曲がり、彩とその近くに居る俺を見つけて俺のみに殺氣をぶつけながら走つてくる。

（すげー、あのスピードで曲がりきれるのか）

スピードに感心していたのが悪かった、いつもなら簡単に回避出来るものを一瞬の油断で奴の射程範囲内に入ってしまった。

「またしても相原先輩か、今日こそは死つねえええ——！」

「ぐはあつ！？」

ロケットの様に直進しながら接近する奴の普段なら避けられる飛び蹴りを油断していたから鳩尾に入れられ、メキヨツと嫌な音がし、その音と共に派手に廊下を転がり、壁にぶつかることで漸く止まれた。

「あ、あのー相原先輩生きてますかー？」

「祐君大丈夫！？」

「…………」

「返事がない、ただの屍のようだ」

こんなときにも馬鹿をやれるあの馬鹿女が恨めしい、死んだら必ず呪つてくれようぞ、最初は心配してくれてんのかなあ、とか思つ

たが、奴の「ヤーヤ」顔を見てそんな感情は消え去った

そんなことより身体が痛い、これ常人にやつたら間違いなく後遺症が残るぞと思いながら、なんとか動く身体を根性で立ち上がらせ、力の限り睨み付けて見る。

「良かった、生きてたんですね先輩、では私はこの辺で失礼しますね（ちつ、死ねば良かったのに）」

「良かった死んじゃったかと思つたよ」

「おいらちょっと待てそこのドリ、聞こえてないと思つてるかも知れないが聞こえてるぞ」

「なんの事ですか？（わざと先輩にだけ聞こえる様に言つたんですけどから、そんなこともわからないんですか理解できないなら死ねば良いの）」

（その無駄な能力はもつと別なことに使えば良いのに）

「無駄じゃないですよ、私は彩の為だけに使つてこますからね（先輩のようなグズとは違つんですよ）」

「心読まれた！？」

「考へてることが単純ですから顔に書いてあるんですよ」

「へ？」

咄嗟に顔を触りそつこなるが即座に罵と氣づいたので、睨んでやることにした

「うえ、あと少しで先輩の馬鹿差がわかつたのに、（馬鹿でもそこまで無能ではないと）」

「駄目だよ、亜紀ちゃん、祐君にこきなり馬鹿なんて言つちや」

「はつ、すまない彩、相原先輩の悪口を言つちやつて、もう言わないうにするからどうか慈悲を」「

決して俺の方を向くことなく、彩だけを見て答えるのは『松本亜紀』（まつもとあき）、彼女は俺より一つ下で彩とは小学校からの仲だ、常に彩の事を考えていてよく柴川家にも遊びに来ていたから俺の過去についても多少知っている。

昔は俺にも普通に接してくれていたが、いつからか今みたいに人を馬鹿にするようになったが、俺以外には愛想が良く、俺以外からは可愛いとか性格が良いと言われて、銀色一色の綺麗なショートヘアで女性にしてはかなり高い身長で彩に勧められてバレーボール部に入部している、因みに俺は男だが女のこいつと殴り合つたとしても勝てる自信はない、彼女の実家は松本流という徒手空拳を中心とする武術の名家だ、彼女は三人兄弟の次女で実力的には弟の義孝より亜紀が強くて亜紀より姉の雪先輩が強いらしい、雪先輩も亜紀も跡を継ぐつもりはないらしいので、弟の『義孝』が継ぐらしい、亜紀は確かに顔は可愛いと思うが、俺に対しても理由はわからないがとても敵対視している。

「それより祐君、本当に大丈夫？」

彩が心配してきいてくれるが、さつきのやり取りのおかげか、だいぶ痛みが引いてきたので平氣だつ

「ああ、俺は平気だよ。俺達」「食つたり寝を繰り返していたわけじやねえし」

「成る程、まだ殺れると（折角止めは勘弁してあげよ」と思ったのに、そんなに死に急ぎますか？」

「いや、せつばん保健室行ってくれるよ」

やつぱり俺はこいつが苦手だ、確実に隙あれば俺を抹殺しようつとじてるんだもん、因みに急に意見を変えたのはあいつが恐い訳ではなく、本当に痛くなつただけだよ、ホントウダヨ。

「さて、相原先輩は保健室に行くそうだから彩、一緒に帰ろ」
俺には絶対見せない笑顔で彩に言つが、彩はこれから部活の筈だ、
もしかしてあいつ知らなかつたのか？

「えっと、ごめんね亜紀ちゃん私部活が有るんだ、だから祐君と一緒に帰つてくれない?」

（彩）それは俺に死ねと言っているのか？

「あ、ああ」

亜紀はかなりのショックを受けているようで嫌つてはいる俺と帰つてくれという頼みをよく聞くことなく頷いていた。

「じゃあ祐君のことよりしぐね、祐君に寄り道させちや駄目だよ」

俺に寄り道をさせるなど頼んでから小走りに武道場に走つていつた。

流石に寄り道をしたくても出来ない、いやしたくない」と寄り道をするところくな事にならない。

「…………

亜紀は未だに茫然としているので、確実にチャンスだ、今なら口煩い彩も居ないし、天敵の亜紀は茫然としている、彩の部活終了まで暇なのでとりあえず保健室に行くという名目で指導室にいる大輔を誘つて遊びに行こう。

そう思い亜紀の横をゆっくりとばっかりを喰らわないように通り抜け、去り際に『保健室に行くから先に帰つてろよ』と言い残し、ほんの少し足元に細工してあとはひたすら校内をダッシュ、なんで見た目が可愛い亜紀と一緒に帰らないかって？ 僕の精神と肉体が持たないし、嫉妬で闇討ちされたくない。

一年生のクラスは三階があるので、目的の指導室は一階の保健室前、仮に捕まつても保健室に行こうとしたといえれば平氣だらう、三階の階段の手すりに手を掛けた瞬間声が響く。

「アハハハハ、相原先輩？ 今なら許してあげますから早めに戻ってきてくださいね？」

（まずい、あれは亜紀が本氣で怒つている声だ、いつものからかう様な声ではなく、冷たく見下すと言うか、その筋の人には大人気な状態だ）

当然ながら俺にそんな変態チックな性癖はあるはずもなく、かといって戻つても確実に一発は殴られる、だとすれば俺の取れる道はただ一つだ。

「よし、亜紀から意地とか根性とかフル活用して逃げよう、生きる為には仕方がないことだ」

決意新たにその一歩を踏み出そうとした時、何かに腕を捕まれた気がした

「いや、これは氣のせいだろ？、いくらなんでもこんなに早くにたどり着ける訳がない氣のせいだ」

振り向きたくない、振り替えたら死ぬ氣がする、それでも俺は振り替えつた、少しでも早く謝る為に。

「『めんなさい…』

「キヤツ！」

（あれ？ おかしい俺の予感ではパンチで氣絶させられるか、蹴り上げで顎を撃ち抜かれるかの二択だと思つていたんだが）

状況把握の為に恐る恐る瞑つていた目を開けると全然違う人が立っていた。

「なんだ新井か、びっくりさせるなよ」

「なんだとは何よなんだとは、だいたいアンタが勝手にびっくりしたんでしょうが？」

俺の目の前に現れたのは我らがツンデレ代表、『新井涼子』（あらりょうこ）さん、俺とは同じクラスで、金髪ツインテール、身長は平均的だが、胸はおそらく無いに等しい、彼女とは高校二年同じ

クラスとこう付き合ひだが、俺と話すとボケとシッコリの漫才コンビが出来てしまつことで有るだ、漫才は疲れるからあまり話したことは無かった筈だが、告白? そんなフラグを立てた覚えは無い、ならば正式に漫才コンビのお誘い? 美人だが、それによつて発生する「次災害がどんなことになる。

「悪いが、断らせてもらひ、他を当たつてくれ」

「まだ何も言つてないわよー それに、いつこと頼めるのアンタぐらーしか居ないし……」

(ヤバい、めちゃくちゃ可愛い、金髪シンデレ最高、ヤッホー!)

顔を赤らめながら、下を向いて恥ずかしそうに咳く姿はいつも以上に可愛いと本氣で思えた。

「俺に任せとカー!」

「本當?」

とても嬉しそうな顔をしたので、それだけで俺の荒んだ心が癒されていぐ、この笑顔を見せられればたとえどれほど面倒なことでも充分わりに立つだらう。

第三話（前書き）

今回一部あるゲームをやつていないとわからない表現があります。

新井に頼まれた事は、とても簡単だった。

内容は『指導室に居る大輔の様子を見てきてくれ』と、簡単な仕事だったが、気分は晴れなかつた。

「確かにあの可愛い笑顔を見れただけでも俺はラッキーだったと言えるけど、しかし大輔が相手だとはなあ」

落ち込みながら廊下を歩き、目的の指導室で必死に反省文を書いてる大輔と遊を腹いせにこつちを見ているのを確認した後にシャゲダンしてやつた。

（大輔が殺氣を込めて睨んできたが大したことではないだろう）

多少スッキリしたので新井に報告しに2・5の教室に向かっている最中に切りっぱなし大輔の携帯の電源を点けて、携帯に来ていた亜紀からのメールを見て更なる不幸を確認してしまつた。

「なんじゃこりゃー！！」

昔やつていたドラマ、太陽にえろを若干意識しながら叫び、もう一度メールの内容を見てみる。

『件名、先輩へ

今すぐ2・3の教室前になれば、次回会った時が先輩の命日になる可能性がとても高くなります。

もし、このメールを彩に見せたら骨はおろか塵の一つも残らないと思つてください』

（怖っ！ 次会つたらあの子間違いなく俺を殺すよな、こんなことなら新井の頼み事を断ればよかつたな、俺にとつて + にならないことだつたし）

これは俺にとつて大きな選択肢だつた、先に亜紀の場所へ行つて殺されるか、新井の所に言つて精神的なダメージを負うか、どうしたものかと悩んでいると俺の中で天使と悪魔が戦いを始めた。

『先に亜紀の所に行つて亜紀をどうにかして抹殺するのよ』

（お前、本当に天使か！？ 白い羽は生えてるけど中々エグいこと言つたな、次は悪魔の言い分を聞こうじやないか）

『先に新井の所に行つて精神的ダメージを負う前に抹殺する、その後亜紀を抹殺して学校から逃亡する、これが最良だ』

（いやいや、お前らどちらも言つてることは犯罪だから、捕まるわボケ、それ以前に亜紀を抹殺する難易度は半端じやないし、といつか一方的に俺が殺られて終わりじゃね？）

全然気が乗らないが、とりあえず2・3に行く前に2・5に向かわなければ、無事に2・3から生きて出られるかわからないからひとまず亜紀ではなく、新井が待つてている2・5に先に向かうことになった。

「よう、戻つた…ぞ？」

「ひやうー？」

2・5に着いたとたん驚くべき物を見てしまった。

なぜなら、新井が大輔の野球で使うバットに一心不乱にすりすりと頬擦りをしていたからだ。

「……

「えっと、これには深い訳が有つて」

「じゃ、俺は帰るから、アバヨー！」

「ま、待つたーー！」

ぐえつ、あの野郎俺が後ろを向くと同時に距離を詰めて首根っこ引張りやがった、それもかなり手慣れた動作で。

「ゴホゴホ、お前、俺を殺す気か？」

「そうね、この秘密を知られた以上死んでもいいのも良いかしら？」

(あれ？ なんかキャラ変わつてね？)

一目見たときから誰かに似てると思ったら漸く誰か分かった、こいつは亞紀に似てるんだ、だからあの殺人的な動きが出来たんだ。

「落ち着け、話せば分かる、落ち着いて話合おうじゃないか、きっと、いや必ず分かり合えるからその手に持つた大輔の金属バットを持つて近寄るな！」

「平氣よ、一瞬だから」

ゆらり、ゆらりと動きながら近づいてくる新井、このまま大声を出せば助かるかもしれないが、近くの教室には亜紀が居る、これを見たら間違いなく俺を助ける側ではなく、殺す側に回るに決まってる、それだけはなんとしても避けなくてはならない。

（ならば俺が使える作戦は一つしか無いじゃないか、昔の人は良いことを言つたよな、三十六計逃げるにしかず、逃げるが勝ち、となあ！）

逃げ込む場所は幾つかに絞られる、一つは彩の居る、競技館、二つ目は自宅、三つ目は生徒指導室の三択に絞られた。

（どうする？ 彩の居る競技館に逃げるか？ いや、不可能だな、彩が盾になってくれるのは亜紀の場合だけだ、新井が相手なら大輔の所に逃げるか？ いやいや、さつき散々煽つたばつかだからな、新たな敵を産みかねない、となると残った場所に逃げるしかないが、全力で）

逃亡ルートを決めた俺は周囲を見渡し、ジリジリと距離を詰めてくる新井から離れながら、状況を改めて整理し直す。

（よし、落ち着けよ、まずはここは萩野高校（通称萩校）の一階、靴は持つていなくて、2・5に居る、敵は目の前に居る新井に、二つ隣の2・3に居る亜紀、今俺に殺意を抱いているのはこの二人で、その二人から俺は死ぬ気で家に帰るつもりだ、ここから家まで走つて10分、この下は直で玄関に繋がってる、すなわちこの階から飛び降りれば勝ちだ、よし勝てる！）

作戦を組み立てた俺は即座に行動に入る準備をする、まずは一瞬で

良いから新井の田を眩ませる為に黒板に向かって走る。

「逃がすかあああ！」

背後からブンブンと手に持つた金属バットを振り回し、追いかけてくる。

「おいおい、こんなの当たつたら間違いなく脳挫傷かなんかは起ころな」

必死に逃げたり、向き合つて金属バットを避けたりしながら少しづつ近寄り、黒板消しをとり、おもいつきり叩いた。

「くつ、げほげほ

予想通り、隙が発生して、新井の脇からを通り抜け、助走がついたまま跳躍し、下へと落ちる。

「うおあああ、思つてたより高けえ！ よつと」

自分でも予想外な高さだったので少し取り乱したが、なんとか着地に成功した、周囲には人がいなくて助かつたが、2・3の教室をふと見てみたら、般若の如く怒り狂つていた亜紀が俺を見てニヤリとするのが見えた。

（まづい、ここについては絶対に駄目だ、亜紀の身体能力は新井を軽く凌駕し、俺より少し高いレベルだ、男の中でも身体能力が高いほつだと思う俺だが、逃げ足以外では奴にほとんど負けている、（逃げ足でもたまに追い付かれる）俺が出来たことを奴が出来ない訳がない）

校舎の下駄箱から靴を持っていき、全力疾走を始めると同時に亜紀も一階から飛び降りて来た。

(ええい、萩野の女性は化け物か)

「俺が言つ台詞じゃないが、危ないから止めとけってそういうの！」

「ははは、先輩貴方を殺るためならば大体のことはやってやるさ」「いつの間に靴を履き替えたのか、亜紀はものすごい速さで追いかけてきた、きっとアレは何かイカサマがあると信じたいものだ。校門を抜け、商店街に出た俺は人がよく通る場所だけを走り、人の合間を駆け抜ける。

しばらく走り続けると、商店街を抜けることが出来た、後ろを見ても亜紀が追いかけてくることはなかつた、おそらく振りきれたのだろう。

「ふう、急死に一生を得たつて感じか

生き延びた事を感謝し、ゆっくりと帰り道を歩いて行く。

(ここまでくれば、あと少しだな)

目と鼻の先には目的地の団地『風花』（かざはな）が見えている、この団地の一階、205号室に着けば逃亡完了となる。

（しかあーし！ まだまだ油断は出来ないな、亜紀は目的地を知ってるだろ？ し、諦めの悪さは筋金入りだから待ち伏せでもしてるとかも知れないな）

周辺に人影や嫌な予感は無し、安全を確認しながら入っていへ。

（亜紀の姿は無し……か、俺の勝ちだ！）

205号室の前まで来た俺はすぐに制服のポケットから鍵を挿し込み、ドアノブを握り勢いよく回すが、何故か開かなかつた。

（あれ？ まさか開いてたか、いや鍵はちゃんと閉めたし、誰か来てるのか？）

俺は友達と遊ぶ時や彩達が来て俺が居なくとも入れるようにドアの付近にプランターを置いて、土の中に合鍵を入れて置いてあるから誰かが来たのかもしないが、今日は誰かと遊ぶ約束をした覚えは無いし、その類いのメールも来ていない、気になるが入れば誰が来たのかわかるので、深く追求せずに、もう一度鍵を差し込み、今度こそドアを勢いよく開けた。

「ただいま！ 誰か居るのか？」

玄関で声をあげるが、シーンと静まり返つていて返事も返つてこない。

（もしかして本当に鍵を掛け忘れたのか？）
ゆっくりと足音を發てないよう歩きながら自分の部屋のドアを開けた。

「…………

「…………

思わず沈黙してしまつ、全身からは危険信号が鳴り響いてい、部屋を開けるとさつきまで命懸けの鬼（じつこ）（俺にとつて）の相手が怖いほど素敵な笑顔を向けてこちらを見ていたのだから。

第三話（後書き）

シャゲダン駄目、絶対に

（これは明らかな死亡フラグだったのかな？）

そんなことを思つてこると声を掛けられる。

「先輩の部屋なんです、座つたらどうですか？」

「は、はいっ！」

亜紀は俺のベッドの上に座つていて「一コ一コ」と笑いながら明るい声で語り掛けてくる。

俺はO H A N A S I（処刑）がいつ始まるか戦々恐々としながらゆつくり正座で床に座る。

「先輩に聞きたいのは一つだけです、どうしてせつかくメールしてあげたのに返信もせずに一階から飛び降りて逃げたんですか？」

「コニコと笑顔だが、田が笑つてない、嘘をつけば即処刑といった所だろ？」

「えつと、メールに関しては返信を忘れてて、逃げたのは別の理由で死にそうになつたからです！ すみませんでしたあー！」

日本人、いや人類の最終奥義、土下座を発動して誠心誠意謝ることにした。

（あれ？ 後輩に全力で土下座してゐ俺つて一体なんなんだ…？）

微妙に涙が出た氣がするが、これは汗と断定しておいた、決して後輩の怖さに泣いたわけではないと信じたいものだ、本当に。

「先輩」

「はーつー 何でしょつか亞紀わーー」

（もうプライドなんて知ったとか、そんなもの一昨日犬に食わせた）

頭を上げずに、床に額をくつつけながら亞紀の次の言葉が俺にいつての死の宣告ではないことを祈りながら待つ。

「先輩、もう良いんですよ顔を上げてください、私はもう怒っていませんから」

「へ？」

普段ならば『命を捨てる覚悟は出来てますか？』とか『懺悔は済みましたか？』とかの筈なのだが、今日に限つては優しかった。

「私も悪かつたんですよね、本当にすみません」

「あ、いや別にそこまで謝らなくとも

珍しく頭を下げて謝る亞紀を見て驚くと同時に何かが引っ掛かる。

「代わりに一つだけお願ひを聞いてくれますか？」

亜紀にしてはやけに真面目な顔をして言つるものだから思わず「クリと頷いた

「明日の日曜日は空いてますか？」

（まさかの展開！！ なにこれはフラグなのか？ いやそんなことが有るわけない、こいつのフラグを立てた覚えは無いし、立つならお姉さんの雪さんに立つて欲しかつた。）

妄想の海に入ろうとしていたところ亜紀は俺をウジ虫を見るような目で見つめていた、相変わらずそういう趣味の人に大ウケしそうな視線だつた。

「コホン、で何の用なんだ？」

「実は義孝が久しぶりに先輩に会いたいから連れてきてくれって言つたから、家の道場まで来てくれませんか？」

「断る、それだけは本当に却下だ」

「なつー？ 意地でも来てもらいますよ」

「行きたくないでござる、絶対に行きたくないでござるーー」

部屋を飛び出よとした瞬間何か雑誌のようなものが後頭部に直撃しておもいっきり転けた。

「つてえー、つー？ これはまさか

投げられた雑誌はいつも俺が愛読しているH口本の雑誌だった。

「なぜ、これ？」

「これですか？　たまたまベッドの下を覗いてみたら見つけただけですよ」

「口二口笑顔を絶やさず新たにベッドから取り出しそうせつする。

「これは彩に報告しても良いですか？」

「わかった、そちらの懇求を全面的に承諾しよう、こやせせていただきますので彩に報告だけはお許しください、亜紀様あ……」

体勢を立て直し、もう一度土下座で頼む。

（彩にバレるのだけはまずい、以前バレた時の事を思い出しだけでも……ヒイイイイーふ、震えが止まらない）

その時の彩の怒りを表現するなら、亜紀が本気で震えるぐらうだつた。

もし、よくわからないうらあれだよ、言ひ口とを聞かない部下に収束砲を撃つて撃墜する人、あんな感じの怒りと思つてもうつて構わない、つまりそれほど彩の怒りは恐ろしいなど言ひ口などだよ。

「あつたく、そんなに義孝が嫌いなんですか？」

「いや、そういう訳じやないんだがなあ（本当は義孝とお前が苦手なんだよ）」

「なるほど、どうちが一番苦手なんですか？」

「それは勿論おま、…じゃなくて苦手な人なんて誰一人いません」

「よろしく」

汚え、アイツ絶対汚えよ、本音を言いつになつたら携帯を見せてきたんだもん、あれは変なことを言えば彩にチクるつていう意味での齧しなんだもん。

「そんなことよつ、そろそろ帰れよ、尚子さん心配するだ

尚子さんは亜紀の母親で俺が亜紀の家に行くといつも赤飯を炊こうとする困り者だ。

「まだ平氣ですよ、それより暇なんでゲームしましちよ

「ちやんと連絡しとけよ健太さんには俺が怒られるんだから」

健太さんは亜紀の義理の父親だが、家族全員仲良く、そして明るくをモットーにしているため再婚に關して妙ないぞ！」やは起こらなかつたらしいが、家族を大切にしそぎるので、子離れ出来ない親代表に選ばれるだらつ。

「はいはい、ちやんと連絡しますよ

本当にわかったかは知らないが、とりあえずちやんと返事をしたから、ゲームを取りに隣の部屋まで行き、P 2を持ってコンセント

の配置をする。

「何のゲームがやりたい？」

招かれざる客とはいえ、一応は客なのでリクエストを聞いてみる。

「そうですね、先輩が持つてるエロゲやギャルゲーがやりたいです」

「わかつ……」にはそんなものないぞ

危なくある場所を教えそうになつたが、なんとか免れた、俺は隠してある場所とはあえて正反対の冷蔵庫に視線を移す。

「へえ、そこが隠し場所ですか」

近寄つて確認しに行こうとする亜紀を止めて、別の話題に移行させようとする

「ぐつ、それよりその他に何がやりたい？」

「ふつ、先輩の趣味を確認するよつしたいことは無いですね！」

押し合いになり、俺は本気のフリだが、亜紀は若干本気で押していく、全力を出しても勝てない相手が若干とはいど本気を出していくのだから勝敗は呆気なくついた、俺が弾き飛ばされるという形で。

「くせつ、やめひー！ 荒らすなー！」

「ふつふつふ、これが先輩の趣味かあー！」

叫びと共に、冷蔵庫の下に有る何かを引き出した。

「「う、」

「「う？」

「うわああああー！」

いきなり叫び、俺から全力で距離をとる。

「い、いつたいなんて本を読んでるんですか！？」

「ちよつと待て、そこにあるのは料理本のは……ず、なん……だ
と？」

何故、何故だ、何故アレがここに有るんだ、アレは俺の所有物ではないし、俺の好みとは正反対の書物だった、名を『世界の幼女大図鑑』これで今夜は寂しくない…』

「亜紀、ちよつと待つてくれ」

「近寄らないでください、穢れが感染します」

ゆっくり近寄るとする俺に本気で殺氣を込めて睨み付ける亜紀にどうするかを考えなければならない

- 1、正直に話す
- 2、そうだよ、僕は亜紀みたいに貪乳とか、小さな子が好きなんだ
と存在しない性癖を告白
- 3、土下座して話しを聞いてもらう

4 彩に説得しても「ひ

5 襲う

（さて、どれにしたものかひとつまず一一番と五番は論外だな、話しならんし、四番も勘弁してほしいな、更なる厄介事に巻き込まれ兼ねない、となるとあとは一番か三番か、でも土下座はさつき使ったしなあ、かと言つてまともに話を聞いてくれるとは思えないしなあ、ホントどうしよう）

side 亜紀

信じられない、確かに先輩は多少変態な部分もあつた人だけ、まさか口リコンだつたなんて。

（しかも、この表紙の子顔だけは凄く私に似てるし、もしかしてずっと私を狙つていた？ もしそうなら先輩は危険だ、最悪彩にも被害が及ぶかもしれないから早急に始末しなきや）

「先輩、いえ変態口リコン野郎、今すぐ貴方を殲滅する事にしたんで、懺悔を済ますまもなく無惨に死ねええ！」

言葉と共に今出せるスピードと威力を最大限に引き上げ回し蹴りを放つ。

「うおおおーー！ 死んでたまるかああーー！」

私の蹴りを精一杯身体を捻ることで回避したが体制を崩してしまつたので私に向かって倒れ込んで來るのでボディーブローを叩き込む

用意をする。

「ちよつ、待つた」

「問答無用です」

にこいつと今見せられる最大限の笑顔とパンチをレバーに叩き込んだ。

「ぐぼあつー?」

酷い悲鳴と共に床に倒れ込んだのでその上をわざと踏むよついこしてゾンビのような呻き声をあげている先輩へんたいを無視し帰宅した。

（まつたく、いつたい先輩は何を考えているんだ、ただのエロゲやHな本ならまだしも、あんな小さな子や私に似た…）

そこ今まで考えて自分の顔が真っ赤に染まっているのを自覚する。

（私は何を考えているんだ！？ 相手はあのど変態の先輩だぞ、確かにちょっとエロいところはあるけど、そのぶん誰にでも優しくて私を理解してくれる って違う違う、私は別に先輩の事が好きなわけじゃない！）

結局私はもやもやした気持ちを抱えたまま帰宅した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2018z/>

変わりなき世界の中で

2011年12月25日22時47分発行